
平成 20 年度卒業研究発表会要旨集の巻頭にあたって

遠山 健 (筑波大学生物学類 4 年)

一年前の今頃、私は平成 19 年度卒業研究発表会の運営委員として、この卒業研究発表会に携わっていました。そのときに見た卒業研究生の先輩の姿はとても大きく、立派な存在に感じたのを今でも鮮明に覚えています。それから一年、あのときに見た立派な先輩方に少しでも近づこうと日々所懸命に卒業研究に取り組んできました。私にとって、この一年間は実験結果に一喜一憂しながら、研究の面白さや大変さを身をもって感じた一年でした。一年というわずかな研究生生活ですが、その中には数え切れないほどの喜びや苦勞が詰まっています。今となってはどれも貴重な経験となっています。卒業研究生は卒業研究発表会をもって大学での学習活動のゴールを迎えますが、またすぐにそれぞれが新たなスタートラインに立ちます。大学院に進学して研究を継続する人もいれば、社会人として新たな生活を始める人もいるでしょう。進む方向は違えど、卒業研究での貴重な経験が将来きっと様々な場面で生きてくると思います。

この一年間、各指導担当教員の先生方は卒業研究生を必死に支えてくださいました。こうして私たちが卒業研究発表会を迎えられるのも指導担当教員の先生方のおかげです。この場を借りて深く感謝いたします。そして、今年もこのような最高の舞台で卒業研究の成果を披露できることを大変うれしく思います。準備・運営にご尽力された世話役の先生をはじめとする諸先生方、また 3 年生の運営委員のみなさん、本当にありがとうございました。1,2 年生のみなさんは、今後もこの素晴らしい卒業研究発表会をぜひ来年以降も継続し、よりよいものに発展させていってください。

Communicated by Kensuke Yahata, Received February 5, 2009.